

## 序言

禅文化研究所において唐代語録研究班が結成されたのは、昭和三十九年のことであった。入矢先生を講師に招き、柳田先生が中心となって会談が進められた。幸運にも私はそのはじめから末席につらなつたのである。

当時はまだ複写機などという便利なものはなかったから、岡田宜紀君と私とでガリ版ずりのテキストを作つた。そんなわけで、私の手許には初期に読んだもの全てが残っている。ただ日誌をつけなかつたので、いつ何を読んだのかということはさっぱり分らない。

そんななかで、たった一つだけ日付の分かるものがある。六祖慧能禅師碑銘である。テキストの二頁目の上欄に、

ドミュヴェル氏のマフラーの切端

一九六六年2月25日共に講読す

と記されている。切端といっても紅と黒の糸屑なのだが、パラピン紙に包まれて健在である。テキストを作つたのは私で、字体が仲々よろしいとお褒めにあずかつたのを憶えている。

その朝、入矢先生が徹夜で準備されて来たことが一目で見取れた。私の書込みもいつになく詳細である。

当初は敦煌文献を中心に読んで来たのであるが、そろそろ種切れになりかかつたこともあつて、昭和四十三年から祖堂集が取り上げられた。はじめは従来どおり読み放しであつたが、若い研究者の間から、何等かの形に残そうという気運が起こり、担当を決めて訳注を作ることになった。次回までに原稿にしてコピーを作り、皆んなの手許に配布した上で、入矢先生の校閲を仰ぐことになつたのである。

読み始めたのは巻五の大顛和尚からであるが、原稿を作り出したのは巻九の九峯和尚の途中からである。私の手許には全て揃つており、

一九七二・六・二三 担当 西尾

というのから始まる。原稿の出て来る順に担当者名を記しておこう。

西尾賢隆 古賀英彦 寺沢兌 中西久味 川島常明 沖本克己

当時、入矢先生はなるべく若者の言うところを残してやろうとしていたらしく、今から思うと少し恥ずかしいような長広舌が見られる。したがって今回活字にするに当たってもそのまま載せるが、長すぎるものは削ることにした。

原稿のない部分は、私が当時録した句読し、書き込んでおいたコメントを注記した。また序文および巻一から巻四までは、首尾を整えるために新たに訓読し、若干の注をつけた。

古賀英彦記